

आयूस: あーゆす

(発行) 京都文教大学図書館
京都文教短期大学図書館/京都府宇治市槇島町千足80

❖❖❖ Wi-Fi / ワイワイ図書館 ❖❖❖

京都文教大学図書館長
総合社会学部・教授(社会学) 柏岡 富英

大学と高校とを較べたとき、大きな違いの一つは、大学には図書館があるということだろう。いや、ただ「ある」だけではなく、大学にとって図書館は「なくてはならない」施設なのだ。「大学：サッカー＝図書館：ボール」と言い切っている。これをもう少し極端に延長すると、図書館と縁のない大学生など、悪い冗談にすぎない。

近ごろ電子出版がずいぶん盛んになって、伝統的な出版業界をおびやかしている。僕はそれを歓迎しているし、実際にアイパッドで「本」を読む。簡単な言葉調べや論文のためなら、むしろタブレット端末の方が便利だと思う。寝転がったままで、英語でもフランス語でも日本語でも、あるいは百科事典でも、即座に調べがつくのは本当に助かる。グーグル地図もありがたい。しかし、どう考えても、たとえばマルクスの『資本論』四巻を電子媒体で読む気にはなれない。いい恋愛小説は、きれいな装丁の本で読みたい。

これは「慣れ」や「進歩」の問題ではないように思う。電子媒体と印刷媒体のどちらが優れているかという設問は、たぶんあまり意味がない。「ナニで」読むかは、そのときどきの都合で決めればいいのである。もっと根本的な分かれ目は、そも

そも読むか読まないかということだろう。たしかに図書館はもっと積極的に電子情報に取り組みねばならない。しかし、「本」に正面から取り組めない学生が、タブレットでもりもり読む、という図柄は、僕には想像できない。

もう一つ、伝統的な「図書館」のイメージは、最近ずいぶん様変わりしている。なんだか薄暗いところで、だれもが押し黙ってしかつめらしい顔をしているムツカシそうな洞穴というのは、もう古い。新しい図書館は、明るくて開放的で、みんな議論するための広場をめざしている。京都文教大学でも、そういう図書館を実現したい。Wi-Fi環境も整えたい。そのことで、この大学の学生がワイワイ言いながら知的ボールを蹴り合うフィールドを実現できれば、嬉しい。

(かしおか とみひで)



タイトルの数字が何を意味しているか、おわかりになるだろうか。これらの数字は、社会心理学を研究・教育する私にとって、宝のありかを示す道標である。

図書館にある本の背表紙には小さなシールが張られている。シールの一番上の段に書かれた数字は、分類番号と呼ばれるもので各本の分野を表す（分類番号と二段目の著者情報などを合わせたものを請求記号と呼ぶ）。「140.」「141.」という数字がついた書籍を例に挙げると、これらのように『1』で始まる番号は哲学分野の書籍であることを示している。また、さらに細かい分類でいうと『140番台』は心理学に関する書籍であり、「140.」は心理学一般、「141.」は普通心理学（認知心理学や知覚心理学など）を扱った内容の書籍である。日本にある図書館の90%以上では、同じルール（日本十進分類法）に従った分類記号がつけられており、分類番号順に図書が配架されている。そのため、はじめて入った図書館でも、自分の興味のある分野の数字を覚えていれば、その分野の本をすぐに見つけることができる。探している本がなくとも、いや、そんな時こそ、自分が大切にしている分類番号の書棚に行き、端から眺めていると、思いがけなく面白い本に出会ったりする。目的の本があるとかえってその本を見つけて満足してしまいがちだ。必要な本がある時だけ図書館に行くという学生の皆さんには、ぜひ、自分にとって大切な分類番号を見つけて、分類番号を頼りに宝探しのように書棚を眺めて歩くことをお勧めしたい。

さらに、この分類番号には、学問を理解する上で面白い情報も隠れている。例えば、心理学（140番台）は、分類上、哲学（1）に含まれている。「心理学の過去は長く、その歴史は短い」と言われているように、心理学の過去はギリシャ哲学にまで遡ることができる。紀元前4世紀頃、ヒポクラテスは人の性格と体型の関連を論じているし、アリストテレスは霊魂（心）について議論している。また、17世紀には、デカルトが心と身体の関係について深い考察を加えたり、スピノザが感情（こ

ころ）は脳によって生み出されるといった現代にも続く仮説を唱えたりしている。このように、心理学の母は哲学であり、分類番号もこれに倣っているといえるだろう。本学で専門とする学生の多い臨床心理学の分類番号も「146」であり、哲学に分類されている。

しかし、ここで問題となるのがタイトルに書いた「361.4」である。この番号は、社会心理学の書籍を表している。そう、私が専門とする社会心理学は、哲学分野（1）の心理学の内側には分類されていないのである。冒頭の『3』は社会科学、『360番台』は社会、『361』は社会学を示している。そして、361の後ろについた『.4』が社会心理学を表すのである。つまり、図書館界（こういう表現をするのかはわからないが…）では、『社会科学』的に『社会』を扱う『社会学』の中、あるいは隣の学問として社会心理学は分類されているのだ。これは非常に面白い分類で、社会心理学の生い立ちにも関わっている。社会心理学が始まる以前の心理学では、「個人を動かす心」が主な研究対象であった。そんな流れの中で、単なる個人ではなく、「社会の中で生きる個人の心」に関心を抱き、その重要性を指摘する心理学者達が現れ、社会心理学を生み出した。しかし、それと同時期に、社会学者の中にも、社会学が研究対象とする「社会現象」を理解するためには、「人の心」を考慮に入れなければならないと考える人が出てきたのである。こうして心理学だけではなく、社会学の側面からも、「社会心理学」が生まれた。実際、1908年に出版された、心理学者マクドゥーガルの「社会心理学入門」と社会学者ロスの「社会心理学」という2冊の著作は、ともに社会心理学の始まりの書とされている。『361.4』は、そんな社会心理学の生い立ちを反映した数字なのだ。心理学と社会学から誕生した社会心理学は、哲学を母に持ちながらも、故郷から離れた新たなフィールドを築いているのである。

それぞれ本が持つ分類番号の意味、隣り合う分野の関係性には、学問の歴史やアイデンティティ

が隠れている。図書館で本を眺める時には、そんなことも考えてみると、より楽しめるのではないだろうか。

さて、このように図書の分類番号について述べさせていただいたが、この分野の専門家はもちろん、司書の皆さんである。私の文章の中には不十

分な部分があるだろう。なにとぞご容赦いただきたい。ただ、学生として、研究者として、教員として、そして、図書館カウンターの(元)アルバイトとして、図書館と付き合う中で知った、図書館の楽しみ方を伝えたかった「こころ」を察していただければ嬉しい。

(あさい のぶこ)

●●● 私が本を読みたくなるとき ●●●

食物栄養学科・専任講師(調理学) 福田 小百合

これまでの読書量は決して多い方ではないと思う。でも、私の中で読書の波があって、ビジネス書はタイトルで選ぶことが多いが、小説の場合はこれ！と一度スイッチが入ったら同じ作家の本を次から次へ徹底的に読まない気が済まない。ただし、読むスピードは早いかもしれないけれど、残念なことに内容を忘れるのもとっても早い。その時々に入っていた作家の記憶を辿ると、それを読んでいた頃の事を懐かしく思い出す。歌を聴くと、その歌が流行っていた頃の記憶や風景が蘇る感覚と似ている。しばし、私が気に入った作家をばらばらと思い出してみる。

小学生の中学年頃には江戸川乱歩の少年探偵団シリーズと怪盗ルパンシリーズにはまり、男の友達と競って全巻制覇して、将来は探偵になる！と決意した。高学年頃になると、忍者に強い憧れを抱いていた私が薫くみこの探偵局シリーズや12歳シリーズにはまり、多少、女の子らしい感情も持ちはじめた。(ちなみに今でも、忍者にはなりたくない。職業として成り立つのなら、教師か忍者か迷っていたような気がする。)そして、中学、高校は部活と受験の記憶ばかりで、あまり本とどっぷり過ごした記憶はない。けれども、星新一や筒井康隆のショートショートを細切れに楽しんでいた記憶はある。大学生になると長い通学時間、いつも端っこを狙って座り、長閑な電車で揺られながら、課題と睡眠の合間を縫って、特に三浦綾子と宮本輝の文庫本を読み漁る時間が大好きだった。毎日、バイト、部活やサークル、習い事、その合間に勉強をして、次は何を楽しもうという気持ちとは対照的に、なぜか重くて、読み終えた後

に影が残る作品ばかり求めて読んでいたように思う。その後、社会人になってからは、ビジネス書や仕事に関係のある食が話題になっているものが増えたけれども、山崎豊子の社会問題に切り込む小説に夢中になったりした。

子どもの頃の読書と大人になってからの読書は少し違う気がする。もちろん、まわりを忘れて、どっぷり主人公になりきって、次々と空想をかけめぐらすのだが、本を読みたくなるタイミングというか本の役割が違う。子どもの頃は習慣のように読んだり、友達と数を競って読んだり、単純に楽しいから読みたい、遊びと同じようだった。でも、大人になってからは、楽しみということより、頭をリセットしたり、気持ちを静めたい時に読みたい気がする。例えば、あれもしてこれもして、どこに時間を作ろうかと仕事のことで頭から離れなくなる時は、小説が無性に読みたいくなる。別のことを考えて、頭を切り替えたい。頭が考え疲れたときの逃げ道みたいな役割をしているかも。もう1つの役割はストレス発散の手段。腹の立つことは寝て忘れるという羨ましい人もいるけれども、私はそんなに性格が良くなく、ずっとずっと覚えてしまっているようだ。でも恨み続ける記憶として残っていくのは悔しいので、いつかプラスの記憶に変えたい。そんな時にするのは、体を動かすこと。ひたすら走るとか、ひたすら自転車をこぐとか単純な方がよくて、少し自分が強くなった気がして、気持ちが大きくなる。そして、同じくらい効き目があるのが小説を読むこと。この時に読む小説はとびっきり悲しい物語か感動する物語がいい。本の力を借りて思いっきり泣くと

いつの間にか、とりあえずすっきりしたりする。

大人になった私にとって本は単純に楽しむだけのものではなく、考え疲れた頭をリセットさせたり、ストレス発散の必須アイテムになっていることに気づく。

ところで、今は、仕事と生活に必要なこと以外の時間は極力、子どもとの時間に費やしたいので、頭を空っぽにしたい、ストレスを発散させた

いと思っても、1人走りに行ったり、読書にあまり時間を費やすことができない。今のところ、濡れてもよい格好での“派手な”風呂掃除をしてごまかしている。

単純に遊びのような楽しむ読書をまたしたいなと思う。

(ふくだ さゆり)

CCC 私のすすめる3冊(私の推薦図書) CCC

幼児教育学科・准教授(仏教学) 仲宗根 充 修

◎ 『ぼうさまになったからす』(新編・絵本平和のために2)

文：松谷みよ子、絵：司修／偕成社

ある日、突然、村から姿を消したからすの群れは、海を越え、遠い異国の地で坊様の姿となって、戦争で亡くなった人たちの弔いをしているという。村人たちにかわって、ひとつひとつの墓に経をあげているという。この絵本は、戦争で家族を亡くした遺族のこころの傷みをわたしたちに語ってくれる。「からすよ 二度と 海を こえるな」という最後のことはば、未来をになうわたしたちへの強いメッセージである。



◎ 『なきすぎてはいけない』

作：内田麟太郎、絵：たかすかずみ／岩崎書店

仏教は、愛する人との死別の苦しみを「^{あいべつりく}愛別離苦」と呼び、人生の苦しみ(四苦八苦)のひとつに数える。人はこの苦しみをどのように乗り越え、自らの人生を前向きに生きていくことができるのか。この絵本は亡くなった祖父から愛する孫へのメッセージである。「なくなったものは だれもいきているもの ^いしあわせをいのっている ^いただそれだけを」。受け継がれるいのちの営みの中にいのちの絆が語られる。



◎ 『中島潔作品集 みすゞ憧憬』

画・文：中島潔、詩：金子みすゞ／二玄社

「NHKみんなのうた」のイメージ画の作者としても有名な中島潔。この本は、金子みすゞの詩をモチーフに描いたかれの作品集である。これらの作品は、かれ特有のノスタルジックな情景描写と鮮やかな色彩が際立って美しい。特に、ダイナミックな潮流に鱈の弔いを描いた「大漁」は圧巻。この作品は2010年清水寺塔頭成就院に襖絵として奉納され、現在全国各地を巡回する作品展に出品されている。



(なかそね みつのぶ)

四万十川の橋を渡って

非常勤講師(元総合社会学部・准教授(教科教育)) 永野貴子

岡山発14時4分JR特急南風13号。2003年6月18日、青田の岡山平野を児島半島に向け快走。このあたりはかつて豊表の産地でもあったが、今は見渡す限り田植えを終えた稲田が続く。20分もすれば車窓の両サイドに穏やかな瀬戸の内海が広がり、わが国の架橋技術の粋を尽くした本四連絡橋を渡ると、四国讃岐に。多度津・善通寺・琴平あたりは旧家の屋根瓦に漆喰がしっかりと塗り込められ、母屋を覆うように低い上階の屋根が重厚に乗っかっている。このように少し違った建物の趣を眺めるのも、列車ならではの楽しみの一つである。そうこうするうちに、四国山地の池田・小歩危・大歩危・祖谷地方へと、特急ではありながら、ゆっくりゆっくりとまるで景色を堪能せよとサービスしているかのように高度を上げていった。平家の隠れ里だけあって、車窓から兩岸の山を確認すること叶わず、三大秘境と目される由縁でもあると納得した。ここを抜けると後は南国土佐の高知へまっしぐら。岡山を出てからほぼ2時間半。ここから四万十川河口近くの中村までは、また2時間。しかしその2時間は、ひたすら土佐湾岸を南西に走る2時間である。須崎から望む太平洋の雄大さ。おそらく南風という特急名はこの情景を愛でて付けられたのであろう。とにかく進めども進めども太平洋である。窪川から先は土佐黒潮鉄道にて中村へ。18時45分、ずっと車中であった身体を伸ばし、宿に向け歩き出す。

翌朝、中村駅8時20分発の清水バスセンター行き西南交通バスに乗車。これを逃すと2時間後。日に数本の運行バス。中村は土佐の小京都と呼ばれ、歴史的趣の深い町並みである。市街をしばらく走ると急に川の堤に差し掛かり、大きな橋を渡る。橋のたもとの名盤に「渡川大橋」と記されていた。まさしく四万十川を渡る大橋である。

向こう岸に渡るとすぐに左に折れて、四万十の土手沿いを南下。国道321号線。土佐清水や足摺岬方面への唯一のルートである。どちらかといえばオンボロバスであったが、終点までということで最後尾の席に着き、左側の窓辺から移りゆく景色を満喫した。最初は数名の乗車であったが、間崎というバス停を過ぎ、四万十川に別れを告げて土佐清水市に入ると、一人また一人と乗客が見られるようになった。沢というバス停から、元気なばあちゃんが乗車。大きな声で顔馴染みと会話。茄子の作付けがどうのとか、どこそこの家で会合があるとか、まるで井戸端会議のようである。下ノ加江・八幡橋・芝・和田分岐と相次いで相当数の老男老女が乗車。皆、知り合いのようである。歯に衣着せぬ口調で取り留めもなく会話を交わしていたが、脚の悪い老人が乗り降りするときには、会話はストップ、サッと手助けをする。彼等にとってこのバスは、お互いを確かめ合い自らの存在意義を確認するためには不可欠な空間なのであろう。後部座席で、温かいものが込み上げてくるのを嬉しく感じた。そして間もなく、私達(そう、私達なのである)は清水バスセンターに到着した。

それから6年後の2009年、再び土佐清水の学校を訪問することとなった。同じ月同じ日の6月18日に6年前と同じ南風13号。同じルートで中村へ。翌朝、同じ時刻発の西南交通バスに乗車。四万十川の橋を渡って、間崎のバス停を過ぎた頃、そう、沢というバス停から一人の乗客。あっ、あの時のばあちゃん。あの時は長い髪の毛をクルクルと後ろで束ねていたが、今は男の人のような角刈りに似たショートカット。やはり大きな声で、茄子の作付けがどうのとか、歳だから作るより買った方が楽だとか。間違いなくあの時のばあ

ちゃん。下ノ加江小学校前から乗ったお友達(?)の老人が八幡橋で降りる時、「日射しがきつわから、ゆっくり休み休み帰るんじゃよ。このペットボトル(確かそう聞こえた)持っていけ。家まで遠いからな。」6年前と同じく、元気印は健在である。後部座席からこの光景を再び体感できたことは、驚きはもちろん懐かしい知人に会ったような気分であった。思わずメモ用紙を取り出し、その後の乗降客とばあちゃんの様子を記録した。久百々西口・本奈呂・芝(ここでの乗客は6年前に見覚えがある)・和田分岐(ここで初めて若者1名乗車)・しおさい前・以布利港前(ブーゲンビリアが咲いていた)・窪津分岐まで、ずうっとばあちゃんの知り合いの老人ばかりが乗車。6年前と変わらず、お互いを確かめ合い自らの存在意義を確認し合っていた。ばあちゃんと芝からの乗客

以外は初めての出逢いであるが、ばあちゃんの強烈な印象が乗客全てを呑み込んでいたため、ずっと以前から知っていたような錯覚に陥ってしまった。終点の手前の旭町で大半の人が降車。ここでもまた、ばあちゃんが「降りるのか?降りんのか?降りるんじゃろ?しっかりせないかんぜよ!」と馴染みに声を掛けていた。もうすぐ終点のバスセンター。

あれから4年、初めての出逢いから10年。四万十川の橋を渡って、あのばあちゃんに会いに行こうか。今年の6月18日に岡山から南風13号に乗って。中村からあのバスで。「今でも元気印でいるよ」と、沢のバス停から乗って来てくれることを信じて。

(ながの たかこ)

****「選書ツアーに参加して」****

臨床心理学部3回生 富安 皓行

選書ツアーへの参加のために、久しぶりに本屋へ行った。広いフロアに小説、洋書、医学書、政治経済から絵本に至るまで、たくさんの本が並んでいる。その中からどれでも好きな本を選んでいいのだ。そりゃ誰だって迷うだろう。でも同時にウキウキもする。本探しへ向かう僕の足取りは軽かった。

欲しいタイトルはある程度メモしておいた。大学で入っているプロジェクトに関連する「性」について、いよいよ始まる卒論のために「社会福祉」や「心理学」関係も欲しい。選書ツアーという企画は、学生自身が図書館に欲しい本を選び、その本を置いてもらえる。普通に自分で全部買ったら10万円以上するのだが、人様に(正確には大学図書館にだけ)買ってもらえる。この上なくラッキーだ。

店内を2周し、メモや検索機械などを使いなが

ら本選びがすすんでいく。カゴはもう2つ目が終わりそうだ。カゴを取り換えてもらおうかと思ったとき、あることに気が付いた。自分の選んだ本が、どれも面白くなさそうなのだ。表紙が穏やかな街並みのものや、有名人の表紙などを選んでではいるけれど、どこか万人受けしなさそうな本ばかり。これじゃ図書館の書架に並べたとしても、どれも手に取って読んでくれないのではないか。そう思ったら急に不安になって、今まで選んできた本を全部戻したくなってきた。

とはいえ、選び出したら止まらなかった。まるで、走り出した電車のように足が止まることなく、その後も本を選び続けた。3周目の本は今まで選んだ本よりも、少し明るめのものを選択するようにした。頭がトリップしていく。結局かなりの時間、僕は本に囲まれて、3カゴ分、30冊ほどのタイトルを選んで、本屋を後にした。本を選び

きった疲れと、よくわからない疲れが入り混じったような、そんな感覚だった。

エアコンの効いた本屋に比べると、京都の街は少し肌寒かった。出不精の僕は、夕方から市内へ出向くことはほとんどない。人混みを避けるため、とりあえず近くの飲食店に入った。

ぼけ一としたかった。いつのまにか店員さんが注文の品を持ってきたらしい。とりあえず、それをかきこんだ。牛丼だったような…もしかしたら豚丼だったかもしれない。

食べると少し思い返す余裕が出てきて、あの経験はホントに不思議なものだったと思えてきた。そして、本を選んだ時に感じた気持ちはなんだったのかしらと思いを巡らせてみた。すると一つの考えに行き着いた。

僕の選んだ本たちや、その選び方は、まったく自分の性格や生き方を映しているのではないのだろうか。もちろん興味のある本を選んでいるのだから、それは当然のような気もする。「性」にだって、「救貧法」にだって興味がある。いつかは海外へ留学もしてみたい。

でも、それだけじゃない。当たり障りなく笑顔で生きているつもりでも、どこか浮いている気がする自分。それが嫌でたまらなくて、他人の目を気にして人に合わせる自分。そしてほとんど疲れ果てて一日を終えることもある自分。単なる本選び、たった2時間の本選びで、そんな自分の姿を、他の誰でもなく僕自身へさらけだしてしまったのだ。

すごく恥ずかしい。そう思った。今の自分を誰かに見られたくはない。僕は周りを見渡した。そんな僕に誰も気づいていないようだった。作業着

のおじさんが隣で牛丼を食べている。僕は混みだした店内を抜け出し、三条大橋を渡った。鴨川の流れの音が、いつもよりはっきりと聞こえていた。

いつか読んだ小説に書いてあった。読む本はその人を映すのだと。

その一文に僕なりの一言を付け足すのなら、読む本も、そして本を選ぶ作業もその人を映す、になる。そのことを、全ての本を選び終えた後になって気づいた。

今回の選書ツアーは不思議な体験だった。無我夢中で読みたい本を選び満足しながらも、自分の選んだ本について思いを巡らすと、結果として自分自身にも気づかされることとなった。僕はときどき思い出す。あの時のジェットコースターに乗ったような、短くて激しく感情が揺さぶられた経験を。そしてそれを思い出した瞬間、満足感とともに恥ずかしい気持ちが湧き上がり、あの時と同じように誰かに見られていないか周りを見渡ししてしまうのだ。

P.S. 本選びから3週間後、僕は図書館オフィスに通っていた。本のポップ作成も自分の言葉を紡ぐ作業であり、自分をまた見つめることになる。そのため30冊分も考えるのは非常に大変で、何故あのとき調子に乗ってこんなにたくさん本を選んだのかと後悔もした。

でもこれも、後先考えずに行動して、のちに苦労するという自分の性格を見事に映している気がして、奇しくも僕にとって選書ツアーは自分を見つめる機会にもなったのだと改めて思い返すのだった。

(とみやす ひろゆき)



*** 選書ツアーに参加して ***

ライフデザイン学科Ⅱ回生 前川七海

今回初めて選書ツアーに参加しました。選書ツアーに参加するきっかけとなったのは、4月から始めた短大図書館でのアルバイトです。前期の選書ツアーの参加募集があったとき、アルバイトの際に図書館のスタッフの方から選書ツアーに参加してみませんか、と一度お誘いをいただいたことがありました。初めての事で一人では少し心細くて、友達と一緒に参加したいと思ったのですが、授業の都合などでなかなか人が集まらず、結局前期の選書ツアーは不参加という形になりました。後期の選書ツアーはぜひ参加したいと思い、後期の募集が始まった頃にちょうどゼミの授業があったので、選書ツアーの参加を呼び掛けてみると、その話を聞いた友達が一緒に参加してくれることになりました。自分が思っていたよりも多くの人が参加してくれると言ってくれたので嬉しかったです。こうして私は後期の選書ツアーに参加することを決めました。

選書ツアー当日、各自それぞれカゴを手渡され、そのカゴの中に自分が選んだ好きな本や、興味のある本などを次々と入れていくというかたちで選書をしました。説明の際に、一人3万円分くらいの本を選んでくださいと聞き、私は普段あまり本を買ったり読んだりしないので、本当に3万円分近くも本を選べるのだろうかと思いました。あれこれ本を見ているうちに、これも欲しいあれも面白そうだと次々カゴに本を入れていき、気がつけば自分のカゴの中が本でいっぱいになっていて驚きました。私は料理をすることが好きなので、今回は料理やお菓子のレシピ系の本を多く選んだと思います。さらにライフデザイン学科ということで、ライフデザイン学科の授業内容に関連するような本も選びました。また自分だけでなく、一緒に参加した友達の選んだ本を見るこ

とも楽しかったです。自分とはまったく別のジャンルの本を選んでいたり、この子はこういうのが趣味なんだなあ、などと友達の意外な一面を見ることができました。本でいっぱいになった後のカゴは、一つ一つどれも選んだ人の個性が溢れているように思います。こうして選書された本たちは、短大図書館の書庫入口付近にある選書ツアーのコーナーに置かれます。本の帯には選んだ人がそれぞれコメントを書いたものが貼っており、中には可愛いイラスト入りのコメントもあるので本を手取る際には、是非帯にも注目してみてください。

後日、アルバイトで本の返却作業をしていたとき私が選んだ本が返却されてきました。自分が選んだ本が誰かの目に留まり、さらに興味を持って借りてくれたと思うととても嬉しい気持ちになります。学生選書コーナーは今回参加した人が選んだたくさんの本で溢れています。小説や絵本、インテリアや料理の本など本当にジャンルが幅広いんです。就職に役立つ本もあるので、是非一度学生選書コーナーに足を運んでみてください。さらに書庫の中にもたくさん本があるので、きっとよい本に出会えると思います。選書ツアーは多くの本に出会うよい機会だと感じました。本が好きな方も、そうでない方も一度選書ツアーで、色々な本とふれあってみてはいかがでしょうか。次回もたくさんの人に参加してもらえると嬉しいです。

(まえかわ ななみ)

